

加賀金工水野家史料(一)

——扶持相続訴願關係(1)

黒川 威 人

序

水野家とはいうまでもなく、加賀藩主前田家の白銀細工御用をつとめた水野源六家のことである。同家に遺された由緒書によれば、初代は寛永年中に三代藩主利常につかえ、以後代々金工を家業としてきたが、その末裔は十一代目に当たる水野旺氏(石川県工業試験場勤務)である。同家の概略史は、本学紀要第三十五号で報告した。

本稿は同家に伝わる数百点に上る史料を事柄別におおまかに分類し、年代順に逐次紹介しようとするものである。

今回は御用職人としての扶持相続あるいは家業相続に関する願い出関係の文書のうち年代の古いものを中心に取り上げた。

なお、古文書の筆写は全面的に児玉雅治氏(光村図書出版株)の助力に負ったものであることを記し、謝意を表しておきたい。

乍恐申上候

一 御代々、当時者奥御納戸、表御納戸両所共、私共相勤来、御参勤御用
其外御公事場御様御用当御場、御目明御用時々罷出相勤罷在候、当時
奥御納戸、表御納戸御用相勤申者^者、町役御赦免被遊候、就夫白銀屋故
与四郎義、右御用筋相勤申付、町役御赦免被遊候、其外御用^二付罷出申

時分^考、日手間料被下候、且又御拝領等御座候^三付、数年来私共相勤申
候処、近年其儀相止申候、今般私共町役奉願候、先年白銀屋故与四郎
相勤候通り、町役御赦免被遊被下候様、私共奉願上候、右之趣御慈悲
を以被為聞召上願之通り被為仰付被下候^者難有忝可奉存候、以上

戌二月十二日

白銀屋 源次

白銀屋 源六

後藤 七兵衛

町御奉行所

(朱書) 右ハ寛保二年諸役願之下書

(同年二月二日付でほゞ同文あるも略)

乍恐申上候

一 私義白銀細工仕罷在、親故清四郎迄数代所々御役所御用相勤候^二付、町
役御免被為仰付候、然所私義も故清四郎同事所々御役所御用被為仰付
難有仕合奉存候、就夫故清四郎同事町役御赦免被成下候之様、先達而
書付を以奉願置候処、今以何之御沙汰も無御座候間、恐多御座候得共
重て奉願候、何卒御慈悲を以被為聞召上、願之通り被為仰付被下候^者、
難有忝可奉存候、以上

天明七年二月

後藤七兵衛判

町御奉行所

天明八年御書立

後藤七兵衛

白銀屋源次

右兩人之家柄之者付町役御指免候事

乍恐申上候

一私共仲間之内白銀屋源六義御役所御用数十年令相勤罷在申候就夫せかれ源太郎義今年式拾七歳罷成申候間何卒御用見習役被為仰付被下候様乍憚連判を以奉願上候

右之趣町御奉行所へも奉願上度候間何卒此段御聞届被成下願之通被為仰付被下候ハ難有忝可奉存候以上

寛政五年正月

白銀屋

後藤七兵衛

同 清藏

同 甚助

同 源次

御武具御役所

乍恐申上候

一私義数拾年御武具御役所御用被為仰付難有相勤罷在申候就夫私義及年来申付せかれ源太郎義当年式拾七歳罷成申候間御用之節召連為見習申度奉存候間何卒此段御武具御役所被為仰遣被下候様奉願上候何分御慈悲を以被為聞召上願之通被為仰付被下候ハ難有忝可奉存候以上

寛政五年四月

白銀屋源六

町奉行所

白銀屋源六七かれ

源太郎

右父源六儀、奥御納戸御用数十年、全相勤候付、せかれ源太郎儀、御用見習可申渡る相伺候所、伺之通被仰出候条、御用見習御申渡可被成候、以上

三月三日

田辺群吾印

小松喜左衛門印

九里幸左衛門様

北森武兵衛様

乍恐奉願上候

一私義数代白銀職仕罷在申候処、代々御屋敷様御用御出入被為仰付置難有奉存候御代々様御指料等、御好、重キ御用奉仰蒙、難有相勤罷在申候就夫年頭之御礼、御目通り被為仰付、御料理頂戴仕、冥加至極難有仕合奉存候、御当節恐多奉存候得共、何卒御扶持頂戴被為仰付被下候様、乍恐奉願上候、右格別之御慈悲を以、被為聞召上、願之通被為仰付被下候考、誠ニ冥加至極難有仕合可奉存候、以上

未十月

水野源六印

大脇五左衛門様

寺尾太郎兵衛様

正保二年より水野源六与相名乗候所、改て寛政十一年御扶持頂戴仕候付、改て水野源六与相名乗申候、以上

戌十一月六日

水野源吾

組合頭壹屋

九郎三郎様

私義今日忌明ニ相成申候間、此段御達シ申上候、以上

戌十二月二十六日

水野故源六七かれ源吾事

御買上所御役所

源六

一私儀先祖より韃師職仕、数代御用被為仰付、代々奥御納戸より御扶持頂戴被為仰付、御在国毎ニ金百疋拜領被為仰付、町御会所より町役御免許被為仰付并毎歳百五拾目拜領被為仰付、難有仕合奉存候、然処私儀未ダ御扶持頂戴^并町役御免許、拜領銀被為仰付無御座候、且奥御納戸より御在国毎ニ金百疋拜領被為仰付候、右御尋ニ付如此御座候、以上
戊四月 元光寺寺町

韃師喜三郎

雅眞 花押

肝煎 九六殿

判

六代目源六事

水野源六七かれ

源藏

右源藏親共表御納戸方御用入精相勤候ニ付、せかれ為見習御納戸方見習申渡候条、明二十八日親共同道ニて、役所まで罷出候様、御申渡候事也、以上

三月二十六日

高嶋彦之丞

堀 与八郎

水越八郎左衛門殿

右之通被仰渡候条、必以夫々御申渡候事也、以上

三月二十七日

肝煎 権右衛門

組合頭

喜右衛門殿

水野源六様

白銀屋久次郎

同 源藏様

私義今日御扶持頂戴被為仰付、冥加至極難有仕合奉存候、依而昼夜之内御出、御祝被下候様奉希上候、以上
七月二十二日

文化七年十二月二十六日

^{二ノ御九}奥御納戸御用方見習被為仰付候

右奥御納戸見習被為仰付候間、拾町御会所ニ誓詞被為仰付候

文化七年十二月二十八日

表御納戸御用方見習被為仰付候

文化十三年九月十日

御武具御用方本役被為仰付候

文化十三年九月十六日

御細工所御用方本役被為仰付候

文化十三年十月十四日

表御納戸御用方本役被為仰付候

文化十三年十月二十日

奥御納戸御用方本役被為仰付候

文化十三年十二月二十四日

二之御丸御広式御用方本役被為仰付候

文化十三年ニ被為仰付候得共御限留置不申候

町御会御買手所御用方親源六同様ニ被為仰付候

右御用方如斯ニ御座候 以上

寅六月二十三日

白銀師 源六

肝煎 甚助殿

身当り肝煎江指出候小紙控

私先祖より数代白銀細工仕候ニ付、奥納戸御用等其外諸御所御用代々

被為仰付難有全相勤来り候ニ付、寛保二年四月より町役御免被為仰渡
難有奉存候、然所当八月親源六病死仕候ニ付、私義故源六為替、奥納戸
等御用被仰付難有相勤申候間、何卒親共同様町役御免被為仰付被下候
様、奉願上候此段何分宜様御願上可被下候、以上

十一月

高岡町白銀屋 源六

肝煎 甚助殿

一私先祖より数代白銀細工仕候ニ付、御表奥御納戸、其外諸御役所御
用、代々被為仰付、難有相勤来り候ニ付、白銀屋故々源次、父故源六、
同後藤清次郎、右三人者共、寛保二年四月より諸役御免之義被為仰渡
難有、依而代替之節御願申上候得者、代々御用相勤来り候古キ家柄を
以、右三人之者共格別諸役御免被為仰渡候、然所私父源六義、寛政十
二年ニ病死仕候所、私義親共同事ニ御奥御納戸御用等不相替、御用被為
仰付難有相勤申候ニ付、享和元年七月親共同様ニ諸役御免之義、被為仰
付被下候様奉願上候得共、未何等之義も不被仰渡候間、何卒願之通、
被為仰付被下候様、何分宜御願上可被下候、以上

九月十八日

高岡町白銀屋 源六

肝煎 生左衛門殿

文化三年五代目源六光益、町役御免許御紙面也
御自分御願之通、以来町役御免許之旨被仰渡候に付其段組合頭江茂
申達候

依て為御承知如此候、以上

丙寅十月二十四日

肝煎 生左衛門

白銀師 源六殿

町役御免被仰渡候覚

一町役御免之義親司病死後、享和元年より毎度相願候得共埒明不申候所、

文化三年丙寅十月二十四日ニ御免許之義被仰渡候、享和元年より文化三
年迄六年目ニ埒明申候事

丙寅十月二十四日

白銀屋源六判

町御奉行所

光益花押

岩田伝左衛門様

同 宮崎藏人様

御同心様

町年寄

同 清水郷右衛門様

香林坊興七郎殿

同 竹村三郎兵衛様

同 森下屋三郎兵衛殿

同 水野惣太夫様

同 宮竹屋伊右衛門殿

同 加藤左次馬様

同 清金屋久兵衛殿

横目肝煎

今市屋左助殿

同 平栗屋理右衛門殿

同 楠部屋金五郎殿

同 吉田屋庄三郎殿

同 坂下屋久左衛門殿

肝煎

吉田屋生左衛門殿

組合頭

紙屋喜右衛門殿

文政五年十二月二十四日

左之通り申来り候ニ付、町会所江罷出候所町役御免被仰付候事
御自分義御用有之候条、御場江呼出候様被仰渡候間追付可被罷出候、以
上

十二月二十四日

肝煎 藤兵衛

水野源六殿

(包紙)文政三年正月御細工所御用棟取ニ被仰付候ニ付御細工所奉行様より町奉行様^江申達被遊候御紙面写

御紙面之写

肝煎より御渡被成候事、町会所にて棟取御申渡御座候事

御細工所奉行

町奉行

鞘師

富田矢次兵衛様

戸田右近様

中

小頭

岡田隼人様

鞘師次右衛門

藤沢彦左衛門様

御同心

白銀師

渡辺与右衛門様

山田庄助様

水野源六

不鳴源六郎様

佐久門

鈴木七左衛門

御用者

山田勘右衛門^{物丁}

河村忠右衛門

山岸喜一郎様

己田

松村奎右衛門

仕法方

小立野

右六人以来棟取ニ被仰渡候事

河崎佐三郎様

町年寄

塚本佐七様

香林坊太助様

金屋彦四郎様

中屋

白銀師 水野源六

右之者於御細工所細工方棟取被仰渡候間、尚更御用方無油断相心得候様御申渡之様致度候、以上

正月二十八日

富田矢次兵衛印

戸田右近様

乍恐奉願上候

一私義御役所、御用方被為仰付置難有相勤罷在申候、然処セかれ源吾義当年十七才ニ罷成、細工方義相応ニ仕候、依而御用方見習、被為仰付可被下候之様奉願上候、何卒願之通被為聞召上、被下候者難有忝可奉存候、以上

戊三月

白銀師 水野源六

表御納戸御役所

(右の下書あるも省略)

白銀師水野源六

セかれ 源吾

右之者御細工所御用見習申付候条、前々之通縮方御申渡、当十四日四時過御細工^江御指出可被成候、以上

戊六月十一日

藤田八郎兵衛印

町会所

右御別紙之通、被仰渡候条被得其意御申渡可被成候、且又明後十四日、誓詞被仰付候条、其心得ニ而朝五時頃、御場^江罷出候様、是又御申渡可有之候、以上

戊六月十二日

肝煎 孫六

組合頭畳屋

九郎兵衛殿

御奉行小堀八十太夫様

白銀師 水野源六

セかれ 源吾

右之者御武具方御用見習可申付候

右之通御用可申付候間、其段御申渡可被成候、尤誓詞相濟候而常役所^江罷出候様、且又御門往來之儀、前々之通不指支様、夫御申渡可被成候、

如此調表御納戸、御細工所、御武具方^江指上申控也

以上

戊六月十八日

丹羽源太夫印

有賀甚六郎様

小堀八十太夫様

白銀師水野源六

七かれ 源吾

右之者可申渡御用在之、追付御場罷出候様、御申渡可被成候、以上

六月九日

肝煎 孫六

組合頭畳屋

九郎兵衛殿

人縮誓詞之義^者、前誓詞相用^ヒ可申旨、肝煎孫六被申聞候事

後藤七兵衛^等示談^ニ而此紙面指出候得共、御聞届被成難旨御返^シ相成、時節見合可指出了簡也

私共義先祖寛永年中より白銀彫物職仕、前々より代々御屋敷御表御出入被為仰付、難有奉存候御代々様御指料等御好^ミ御用并御婚禮御用等被為仰付、難有相勤来り申候、就夫御紋附頂戴仕および年頭之御札御目見被為仰付、難有為御祝御鏡餅頂戴被為仰付難有仕合奉存候、且又毎歲御指料并御重器等御拭御用被為仰付、其節御酒等頂戴被為仰付重疊難有仕合奉存候、然所當時私共前々^与違、近年諸品過分^ニ高直之年柄打統、渡世も仕兼其土職方元手之入用之品々并金銀等罷不振総而過分^ニ高直^ニ相成、元手銀仕入方仕兼甚以難渋至極仕候、其上御屋敷様奉始、諸候様方御用薄^ク御家中様御詠之品々も一切無御座、誠^ニ以心痛至極困窮指詰り罷在申候、依而御当節甚恐多奉存候得共、職方金銀等仕入方元手銀^ニ仕度御座候間、忝人^ニ銀忝貫目宛拜借被為仰付被下候様、乍恐奉願上候、何卒前々より年古^キ御出入被為仰付、御用全相勤来り居申候間御憐愍之御詮儀を以被為聞召上被下候様、一編奉願上候、尤返

上方之義ハ被為仰渡（カケ）苦亦御詮儀方も跡々無御座候^者当御後用、

御三所物、御鑓、御縁頭等何成とも御用澤山^ニ被為仰付被下候様、乍恐奉願上候、右之内御目貫、御小柄、御筭ハ御三所物^与申候て、於白銀彫物職口伝も有之重キ品物^ニ御座候依而加様年柄^ニ甚難渋仕罷在申候之間、御救為御用私共成立候之様格別御慈悲を以、右御用何成とも被為仰付被下候様乍恐達而奉願上候、何分^ニも御憐を以被為聞召上、願之通^ニ被為仰付被下候^者、冥加至極難有忝仕合^ニ可奉存候、此段乍恐宜敷様奉希上候、以上

戊五月

水野源六印

後藤七兵衛印

水野源三印

奥御用所

（包紙）二ノ御丸御広式へ指出候御用見習等願書控等入 源吾

一二ノ御丸御広式御用宝曆十三年頃 祖父より相勤申候以上

寅三月

白銀屋源六

町御会所

横目所以後^ニ付如此書出ス

乍恐奉願上候

一私義御役所御用方被為仰付置難有相勤罷在申候然所セかれ源吾義当年二十九才^ニ罷成細工方茂^也達者^ニ仕候依而御用方見習被為仰付可被下候之様奉願上候何卒願之通被為聞召上被下候^者難有忝可奉存候以上

戊十月

白銀師水野源六

二之御丸

御広式御役所

如右天保九年戊十月調留書北村庄助様方^江願置候其節奉行並

留書名前書者也

御広式奉行

留書

土肥権六郎様

北村庄助

渡辺多園様

田中平次郎

岡松甚助様

金子吉太夫

角尾孫兵衛様

村田定之助様

丹羽権佐様

山森九兵衛様

猶又申上兼候得共御内分願上申候私方

代々御用難有相勤居申候此度

代替りニ候所親共之通りニ前

不相替被為仰付難有相勤居申候事ニ

御座候わけて御広式御用ハ両御殿とも前々

より源吾壱人ニ被為仰付難有相勤申居所

当秋貞琳院様御長刀御修覆被仰付

候所私方忌中ニ相成候ニ付初て仲間之内へ被仰付

相勤申候其内私方忌明いたし候ニ付前々の

振合ニて親共同様ニ御用被為仰付被下候様ニ願上

候得共いまた何の御さたも御座なく候ニ付、何卒

親共同様ニ当源六^江不相替御用被為仰付被下候ハバ

難有全事ニ奉存候忌明いたし候てより

段々御内分願上置候得共何の御さたも

御座なく候ニ付漸願上かね候得共何卒

御めんとうながら御序の節御前様より

御頭様まで此段よろ敷様ニ被仰上被下候様ニ

千万願上申候右のわけ御座候まま

何卒今源六^江御用方被為仰付被下候様乍憚御宜敷
御取なし願上申候かつまた故

若殿様御用方故源六^者相勤不申候得共

仲間共^者御用方相勤候まま此段も

仲間同様ニ今源六^江御用被為仰付被下候ハバ難有

奉存候まま何卒憚ながら此義も宜敷御なさけの思召願上申候

私方の事ゆえ猶々申上かね候得共何分く

宜敷様ニ願上申候御多用之御中ニ奉存候

得共御むつかしなから御すきの節

御覽被下候やう御願上申候

卒々 以上

御広式

御武具所

御細工所

右私御用相勤罷在忌懸り申候ニ付、夫々

御達可被下候、此段宜敷御願申上候、以上

戊十一月四日

組合頭畳屋

九郎三郎様

水野源吾

奥御納戸

表御納戸

御広式

御武具所

御細工所

右私御用相勤罷在、忌明ニ相成申候

名も源六^与改名仕候間、夫々御達シ可被下候

此段宜敷奉願上候、以上

戊十二月二十七日

水野故源六悴源吾改名仕

源六

肝煎 権七様

急々 南町

水野源六七かれ

源吾

右之者水野源吾_与相名乗候哉、又ハ白銀屋源吾_与相名乗候哉、名字相名乗候者いつ頃より相願相名乗候_与委曲御糺、只今之内御場_江御申越之様横目所より御談_ニ付急々御申越可被成候以上

戊十一月六日

肝煎 権七

組合頭畳屋

九郎三郎殿

水野故源六養子

源吾

右苗字之義夫々相尋候所、唯今葬式_ニてしかと相知不申尚得_与相しらへ八日_ニ御達可申上候間、左様_ニ御承知可被下候、以上

十一月六日

組合頭畳屋

九郎三郎

肝煎 権七殿

(包紙)水野源六殿 肝煎権七

御自分義御用在之候條、追付御場へ御出可被成候、以上

十二月二十八日

肝煎 権七

水野源六殿

乍恐申上候

一私共武器方為御用御役所御用聞_ニ被為仰付置、難有相勤罷在申候、就夫慶長中より今以御穩密併御武器御品物御用等、御定式御用被仰付候_ニ付、右大切成重キ御用相勤候_ニ付、前々より火事非常等之節_者將束ハ立_テ付羽織、沓_江紋白四つ_ニ而塗笠、着用御免_ニ御座候、私共之義_者、対刀、御役所勤、奥御納戸、表御納戸、御武具所等諸御役所御用蒙居申候_ニ付、非常之節_者諸御役所暨御穩密御道具御渡し、仲間共_等方_江罷出候義_ニ御座候、然所近年町御会所度々御御座候ハ、町役人、立_テ付、ぬり笠着用可致候_ニ付、度々町役人之外、右之將束相用申間、前段被仰渡候得共、私共之義ハ非常之節、風向聞次第諸役所_江罷出、御道具指添可申之段、前々より被為仰渡候義_ニ御座候間、いつれ前段將束仕候、依て乍恐御役所より御合紋御渡御免許奉願上候

天保十年四月頃、碓師平九郎等中間打寄、諸役所_江如此之書物指上候下書也、但_シ是_者先之分_ニ而色々談之上、文も出来候_ニ付、本紙ハ又々跡より出来申候事

御先祖様御代、大坂表_ニ而御用被為仰付相勤居申候

瑞龍院様御代、大坂表より御供被為仰付、御当所_江罷越、於高岡表_ニ而家屋敷拝領被仰付、毎歳正月五日御目見被為仰付、金子三拾疋奉献上候、其後罷帰御当所_ニおゐて家屋敷拝領仕、住居仕候

微妙院様御代も前々之通り御用方被為仰付、大坂表御出陣_ニも御供被為仰付、竹田市三郎様を以、御用方無怠相勤申候_ニ付、御家人同様_ニ被為思召候段、蒙御意、小松表毎歳罷出申候_ニ付献上物奉指上、御目見被為仰付毎度奉蒙御意候、年頭御札奉申上候、三十疋献上仕候

陽光院様御代、御先代様同様_ニ被為仰付、江戸御供被仰付、且上下之節御見送り御迎_ニ罷出、献上物奉指上候、年頭御札金子三十疋奉献上候

松雲院様御代、前々之通り被仰付、江戸表_ニ長々相詰、御用全相勤御供_ニ而罷帰り申候、思召を以以来武器之者御歩行格_ニ被仰、御人数_ニも御指加

被為在候者共ニ候間、武道も心得申筈之被仰渡候

一、是迄御指料御拵本何様（よもぎ）も被仰付候とも、御詮儀之上以来鯨目針杯相申間敷、御用方都而御国職人ニ被為仰付候段被仰渡、但目針竹ニ而柄糸一文半懸リニ可致旨被仰出候、以来武器職人共、若御近火之節、御役所向風筋次第馳寄御大事之品等御座候間、御道具ニ指添相守り候段、被為仰渡候、元祿中も思召御座候ニ付、江戸御供相止ニ申候得共、御扶持方、居屋敷等拝領仕罷在申候、其後武士他ニ居申者共、職方不勝手ニ付、町地之内拝領居屋敷、同様奉願上候所、御聞届御座候、町地ニ居申候者共ハ今以先規之通ニ御座候、享保年中御先代様大切之御用被為仰付候ニ付、惣職人才許被仰付

（朱書）天保十支年四月四十七日身当り肝煎豎町酢屋権七殿（江出）控

私義白銀職仕罷在申候、然所先祖より数代奥御納戸、其外諸御所御用被為仰付置、難有全相勤采罷在候ニ付、寛保二年より父故源六迄四代町役御免暨御扶持頂戴被為仰付、冥加至極難有奉存候、就夫私義父故源六存命中より奥御納戸等御用父同様ニ度々被仰付置、難有相勤采申候間、何卒故源六同様ニ町役御免被為仰付被下候様奉願上候、此段宜御願可被下候、以上

亥四月

高岡町白銀師

源六

肝煎 権七殿

此願書を以天保十支十一月肝煎権七殿（江相願）申候事

私義先祖より白銀職仕、正保二年より諸御役所御用被為仰付、奥御納戸、表御納戸等御穩密重キ御用、毎度奉蒙、代々難有相勤罷在申候、就夫寛保二年より町役御免、父故源六迄四代被為仰渡暨扶持も頂戴被為仰付、冥加

至極難有奉存候、私義も父存命中、文政九年より奥御納戸表御納戸等御穩密御用、父同様ニ度々被為仰付、難有相勤罷在申候、何卒親共同様ニ、町役御免被為仰付被下候様、乍恐奉願上候、右願之通り被為仰付被下候得（者）難有忝仕可奉存候、此段何分宜様御願上可被下候、以上

亥十一月

高岡町白銀師

源六

肝煎 権七殿

去年奥御納戸（江願書）指出シ并仲間中由来書共、指出シ候ニ付、御納戸より町会所（江）、仰被達候様子ニ付、町会所より申来候事（与覚）申候
天保十一年（子）正月十六日町御会所より

我家御用聞ニ被為仰付、代々勤コウ并御扶持、町役御免許等クワシク相調、由緒書之様ニシテ指出シ候之様申来り候ニ付、帳面ニシテ指出ス、且外（右）控帳拵置
天保十一年（子）正月十六日指出ス

七代目源六

其時町奉行跡始留置

町年寄

町奉行
東米寺前 片町 龜田張一郎
水原清五郎様
彦（三巻）番町 香林坊 香林坊茂太郎
大野織人様

横目肝煎

御同心

尾張町 井筒屋宝助

小立野トニシキ 山田良助様

今町 鍋屋弥五郎

藤田彦左衛門様

安江町 近岡屋次左衛門

長町五番町 吉田丹次郎様

本新保 今市屋左次兵衛

四番町 西永与三八様

塩屋町 能登屋嘉兵衛

身当り肝煎

豎町 酢屋権七

乍恐奉願上候

一、私共仲間之内、白銀師源六義文政九年六月御役所御用見習被為仰付置、難有相勤罷在申候、然所此年以前父源六病死仕候、依而故源六同様御用本役被為仰付候様、乍憚連判を以奉願上候、何卒願之通被為仰付下候者、難有忝奉存候、以上

天保十一年四月

白銀師 後藤才次郎印
白銀師 長左衛門印

御武具御役所

天保十一年四月如此相調御役所^江指出ス

(前文下書、朱書あるも略)

父死去之後天保十一年四月御武具御役所小頭宅へ、本役之義相願置出候処、只今^ニテハ父死去之年故、先例を以仲間願^ニテ無之而^者不^レ成候様被申聞候^ニ付、才二郎殿、長左衛門殿二人連名^ニテ願書指出ス案紙控

天保十一年十二月二十八日被仰付候

御武具本役 白銀師 源六

同見習 山口庄三郎 七かれ徳右衛門

後藤七兵衛 七かれ清二郎

河村百右衛門 七かれ芹吉

柄巻師 吉右衛門 七かれ吉兵衛

見習本役一集 柄巻師 長蔵

六人一集^ニ同日^ニ被仰付候事

白銀屋源六

右之者御武具方御用申付置候所、故源六御用方数十年全相勤候^ニ付、今般為代、本役申付候之条、其段御申渡、可被成候、為其如斯^ニ御座

候、以上

西四月四日

富永右近左衛門様

井上井久助様

追て御門往来等之儀、前々之通、御申談可被成候、以上

白銀屋源六

右之者共細工達者^ニいたし候^ニ付、親同様^ニ本役之義相伺候所、窺之通被仰出候条、為其御場此段御申渡シ可被成候、以上

七月十四日

津田藤兵衛

塩川和一郎

久徳猪三兵衛

富永右近左衛門様

井上井久助様

右之通被仰渡候条、以紙面写相達申候間、此段御申渡シ可被成候、以上

七月十四日

肝煎 弥五郎

組合頭

喜右衛門殿

此願書を以、天保十年^亥五月、奥御納戸^江相渡シ候処、奥御納戸より町

御会所^江仰被達置御座候、其時之奉行

奥御納戸奉行

寸崎宝二郎様

木村多勝様

竹下源兵衛様

御同心

岩田清助

森川弥吾吉

萩 文蔵

奥田安太郎

村上平作

私共先年より御役所御用被為仰付置、難有相勤罷在申候、就夫御役所蒙御用候得者、重キ御用之義ニ御座候間、町役御免許被為仰付候、且親跡御用相続次第、町役御免許被為仰付候義ニ御座候、然所近年其義無御座候ニ付、時々町御役所へ奉願上候得共、御聞届無御座候、誠ニ歎ケ敷ク御座候、何卒先年之通り被為仰付被下候様、乍恐御役所より格別之御慈悲を以、町御役所江被為仰遣被下候之様奉願上候、此段宜敷御願可被下候、以上

亥五月

天保十二年四月

御免被仰付候事

研師 助八印

天保十一年十二月

二十八日より半役御免

より本役御免仰渡候

同 太右衛門印

天保十一年十二月

二十八日被仰付候

同 半蔵印

天保十一年十二月

二十八日本役被仰付候

同 太四郎

同 半助

同 四六

同 錠五郎

同 高良又之丞

同 靴師 長次

同断

天保十一年十二月

二十八日町役被仰付候

同 次左衛門

天保十一年十二月

二十八日本役被仰付候

後藤才次郎

白銀師 源六

同 吉助

柄巻師 吉右衛門

天保十二年四月

半役御免被為仰付候

長蔵

木下甚太郎

右之如相調奥御納戸江出又

町奉行

同心

水原清五郎様

藤田吉右衛門様

大野織人様

山田良助様

吉田丹次郎様

乍恐奉願上候

私儀先祖より白銀職仕、御屋敷御表御代々様御指料等御用、今以不相替被為仰付、難有仕合奉存候、就夫何卒来春より毎歳年頭御礼御目見被為仰付被下候之様、乍恐奉願上候、願之通り御聞届被為仰付被下候者冥加至極難在忝仕合可奉存候、以上

子十一月

水野源六

御家老 多和田八兵衛様

同 多和田彦太夫様

御用人 掛蔵茂右衛門様

御表頭 岡 慎五郎様

右四人様共御武具方御主附

当家先祖之頃より代々今枝内記様御用相勤罷在候処、前々より代之内ニ御目見願上候人無之候、就夫今年度年頭御礼御目見願書相認指上候処、御聞届御座候事

天保十一年十二月二十七日願書上ル同二十九年仰渡候事

七代目水野源六

光和

前文通中折中切ニ調上包中折を以折懸包ニ仕上書ニ上与一字書上ル

(右岡慎五郎様迄同文あるも略)

右者武具方御奉行故身当奉行ゆへ彼上迄上ル

私義先祖より

御屋敷様御代々御用就被仰付候、来年頭より毎歳年頭之御礼申上度旨奉願候処、願之趣御聞届之段、御紙上之趣奉得其意難有仕合奉存候、以上

十二月二十九日

尚以来春年頭御礼御揃刻限ハ追て可仰渡旨奉畏候、以上

右御請書案文岡慎五郎様相願候処、如斯認被下候事

年頭御礼之昏面申来候者、如斯御請書上候事

水野源六

当何日年頭御礼御目見被為仰付候段、難有奉存候

右御請如斯御座候

正月何日

若其日指支ならハ当病とか申上候事

天保十一年来春年頭之御目見被為仰付被下候段、奉願上候処御聞届ニ付、則此紙面到来仕候事先代より初而御目見仕候事

多和田八兵衛

多和田彦太夫

掛藏八左衛門

岡 慎五郎

水野源六殿

其許義先祖より当屋敷代々用事就申付候、来年頭より毎歳年頭之礼申上

度旨、願之趣被承届候、以上

十二月二十九日

尚以来春年頭礼日、揃刻限ハ追而可申入候、以上

初而年頭御目見被為仰付候ニ付礼日刻限此紙面到来之事

多和田八兵衛

多和田彦太夫

懸藏茂右衛門

岡 慎五郎

水野源六殿

其許義年頭之礼可被請候条明後七日四時不遅屋敷表可被罷出候、以上

正月五日

文政九年六月十四日ヨリ

一御細工所御用見習為仰付候

天保八年三月二十二日

一同本役被為仰付候

文政九年六月二十日ヨリ

一御武具御役所御用被為仰付候

天保十二年十二月二十八日

一同本役被為仰付候

文政九年十月四日ヨリ

一奥御納戸御用見習被為仰付候

天保六年三月十日

一同本役被為仰付候

文政十年六月ヨリ

一表御納戸御用見習被為仰付候

天保十一年十一月十一日

存候、依而別紙巨細書相添此段宜様奉願上候、以上

丑五月

水野源六印

後藤才次郎印

後藤七兵衛印

奥御納戸御役所

御奉行

南町白銀師

水野源六

(以下次号)

(右の下書あるも略)

私義白銀職仕、文政九年ヨリ奥御納戸等御用被為仰付、御指料等
大切之御用度々奉蒙、冥加至極難有奉存候、就夫何卒町役御免被為仰
付被下候様奉願上候、先達ても度々奉願上候得共、未何之儀も無御座
候間、何卒格別之御是斐を以願之通り被為仰付可被下候、乍恐奉願上
候、此段宜敷御願可被下候、以上

丑七月

白銀師 源六

肝煎 権七殿

町御会所

白銀屋源六郎

一寛保二年四月二十日初而諸役御免許之旨被仰渡候、依て以来町役之
義^者何用^者ても相勤不申候様御申渡シ被下候事

天保十三年七月迄、願指出シ候^者付、肝煎より被達候案紙、如此

立紙^者相認メ上包折懸己シテ上ル

私義奥御納戸、表御納戸、御広式、御細工所等御用方被為仰付置、難
有相勤罷在申候、然所故父源六義、奥御納戸等重キ御用、数十年相勤
申^者付、御扶持頂戴仕、并町役御免許被為仰付相居候所、天保何年病死
仕候、私義も故父源六之通、奥御納戸等重キ御用相勤罷在居候^者付、故
父同様^者御扶持頂戴被為仰付難有相勤罷在申候、夫^者付何卒故父源六之
通、町役御免許被為仰付被為下候様、奉願上候、此義先達而より度々
奉願上候所、末夕何等之御沙汰も無御座候、何卒奉恐入候得共、今般
格別之御慈悲を以、被為聞召上、願之通被為仰付被下候^者、難有忝可奉

存候、以上

注 一、文間の——は史ごとの区切りであり大むね一紙である。

二、改行は必ずしも原文と一致しない。

三、記載順については、年代の特定できないものもあり、また同類のものはまとめたので必ずしも古い順ではない。

四、原文の方は「より」には「等」として表記した。

五、原文で訂正あるものは訂正字句を表記した。